慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ベルンシユタインとマルクス主義
Sub Title	
Author	金原, 賢之助
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1922
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.16, No.1 (1922. 1) ,p.80- 89
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19220101-0080

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ベルンシュタインと
マルクス主義

金原賢之助

社會主義の內部より出發して而も尙ほ社會主義に對して批判的態度を採るものは、所謂修正派社會主義である。換言すれば修正派社會主義は、社會主義の外部よりして之が頭上に鐵鎚を下さんとするものにはあらずして、社會主義の立場に於て之を改革せんとするの運動である。此運動は獨逸の社會民主黨に非常なる影響を及ぼしたるものであつて、從來マルクスの教義に唯一の信仰を繫いでゐた人々にとつては洵に驚異すべき異端であつた。而して此運動を代表して立てる者は卽エドアルド・ベルンシュタイン（Eduard Bernstein, 1850—）である。勿論彼のマルクス主義に對する批判は黨內に於ける嘗々たる非難を蒙り重大なる問題を惹起さざる得なかつた。一八九八年のストツトガルトの大會に於て又其の翌年のハノヴアの大會に於ても重大なる問題となつて、非難は彼の上に集中せられた。カツツキイは最も痛烈に彼を駁し又難じた。ベーベルは黨內に分裂の生ずるを妨止せんと努めたとは言へ、彼の主張に極力反對した。然るにベルンシュタインは斯る攻撃に答へんが爲にストツトガルトに催された獨逸社會民主黨の會議——一八九八年一月三日より八日迄續いた——に一の信書を送つた。其書簡は彼が抱懷しだる信條を簡約に述べてゐるものであつて、彼自らも其信書の中には『主要なる論點に關する余の見解を可なり明瞭に發表して置いた』と云つてゐる所のものであり、又當時の事情を窺ふに足る有力の材料であると云ふことが出來る。而して彼は一九一五年アタベストの講演に於て其修正主義の或部分を撤回したと言はれたけれども、最近雜誌改造への室伏高信氏の通信によれば、彼は決して撤回せずして寧ろ一八九九年の修正主義を繰返したに過ぎずと語つたとの事である。茲に『ベルンシュタインとマルクス主義』と題する一編は此信書の抄譯を試みたものである。是に依つてベルンシュタインのマルクス主義に對する修正意見の大要を知り、以て彼の主張を更に詳細に考察せんとするの序論に代へたいと思ふのである。

彼は右の信書を、『社會主義の前提と社會民主々義の任務』（"Die Voraussetzungen des Sozialismus und die Aufgaben der Sozialdemokratie"）と題する其歷史的著述の第一版序文の中に自ら載錄してゐる。其著述はベルンシュタインの代表的著作と稱せらるゝものであつて、又其は右の書簡に於て述べられたる論究に從つて、「社會主義運動に於ける現實的並に理想主義的要素を等しく强固ならしめん」が爲に、起草せられたものである。從つて右の信書に於て、此書の大意を親知することが出來る譯である。

茲に譯載するものは右の著作に載せらるゝ所に據つたものであつて、文中の節は譯者が便宜の爲に附したるもの、又文中『余』とあるは凡てベルンシュタインを意味するものである。

『社會主義の諸問題』と題する連續したる論文に於て余が述べたる見解は、近頃、社會主義の新聞雜誌及會合に於て議論を惹起した。而して獨乙社會民主黨の大會は、其見解に對して、態度を明かならしむべきであると云ふ要求が提出せられた。之が實際行はれて大會が其要求に應ずる場合には、余は次の說明を爲すを餘儀なくせらるゝのである。

會議の投票は、其が如何に至上なものでもあつても、勿論、社會上の現象の探究より得たる余の觀察を誤謬と爲すことは出來ない。余が『新時代』（"Neue Zeit"）に寄書した事は余の確信の表現であつて、余は其確信を如何なる要點に於ても取捨てることは出來ないと考へてゐるのである。

乍併、大會の投票が少しも余に無關係であり得ると云ふ譯ではないことは、之亦勿論である。從つて特に余が必要を感ずる場合には、余の論究に誤つた解釋を下し又其れより誤つた推論を惹くことに對して防衞を爲す所以も了解せらるゝであらう。自ら會議に出席するを妨げられたるを以て、余は之を茲に筆を執つて陳述するの方法を以て爲すのである。

一

余の論說から實際に得らるゝ推論は、政治的に且經濟的に組織せられた無產者階級に依る政治的權力の略取を放棄することであると、或方面から主張せられた。其れは全く勝手極る推定

であつて、其が正當だと云ふ說には、余は斷乎として反對するのである。

余は、吾人は遠からず來る可き有產者的社會の崩解の前に立てる者である、と云ふ觀察には反對する。從つて社會民主々義は、斯る將來來るべき社會の大危機を期待するが爲に、其作戰を其れに適應せしむ可きであるとの見解にも嚴然たる態度を持する。其れは余が最も熱心に主張する所である。

此大危機說の讚成者は本來『共產黨宣言』の論究を恃みとしてゐるのであつて、其は如何なる點に於ても誤謬である。

『共產黨宣言』が近代社會の發展に付いて述べてゐる豫見は、其が此の發展の一般的傾向の特徵を表はしてゐる範圍內に於ては、正しきものであつた。併し其れは數多の特殊の推論に於て——就中其發展が必要とすべき「時間」の測定に於て、誤謬に陷つてゐた。而して其誤謬なりし事は、『宣言書』の共作者たるフリードリッヒ・エンゲルス(Friedrich Engels)に依り、『佛蘭西に於ける階級鬪爭』("Klassenkämpfen in Frankreich")の序文に於て、承認せられて了つた。尙又、社會の經濟的發展が推測されたよりも遙かに長い期間を必要とする場合には、其發展は亦、共產黨宣言に於て推測されなかつた又推測され得なかつた形式を採り、形體に達しなければならぬ、ことは明かである。

社會關係の發達は、『宣言』の描寫してゐるが如き方法に於ては行はれなかつた。之を秘密とし樣とすることは唯に無益であるのみならず、亦實に愚の骨頂である。財產を所有する者の數は、小とならずして却て一層大となつてゐる。社會の富の莫大なる增加は、大資本家の數の減少を伴はないけれども、併し總ての階級より成る資本家の數の增加を伴つてゐる。中流階級は其特徵を變ずる、然れども社會上の階級より消滅し去りはせぬのである。

生產の集中は、今日に於ても尙ほ、產業界一般に同じ勢力と速力とを以つて行はれてはゐない。多くの生產部門に於ては、固より生產の集中が社會主義的批評家の總ての豫言を裏書してゐるが、而も他の部門に於ては今日も尙其豫言より遙かに遲くれてゐる。農業に於ける集中の經過は尙ほ一層遲々たる步調である。商業統計は、驚く可き程種々の階級に分たれたる經營の組織を示してゐる。而して如何なる大なる階級も、右の段階より消え去らんとしてゐるものはない。經營の內部組織に於ける意義ある變化及其等の相互の關係も此事實を欺くことは出來ないのである。

二

總ての先進諸國に於ては、資本主義的有產者階級の特權が、政治的に一步又一步民主々義的組織に變移しつゝあるを見る。斯る影響を蒙り、加ふるに益々強大となりつゝある勞働階級の運動に刺戟せられて、資本の搾取的傾向に對して一の社會的反動が起つた。其の反動は今日も尙甚だ遲々且微々として進んでゐるけれども、其れにも拘らず實際に存して、經濟生活の益々廣き範圍を其勢力の下に惹き付けんとしてゐるのである。工場法の制定、地方行政の民主化及其活動範圍の擴張、勞働組合及產業組合の組織を一切の法律上の抑壓より解放すること、公共團體の行ふ總ての事業に於ける勞働組織を顧慮すること、總て之等は發達の此時期の特徵である。獨逸に於ては、人が尙ほ勞働組合の抑壓と云ふことを考へることが出來ると云ふ事實は、其政治的發達の高度に在るを示さずして寧ろ幼

稚なるの證據である。

併し近代國民の政治的組織が愈々民主化さるればさるゝ程、政治的大危機の必要と機會とは益々減少するのである。從つて危機說を固執する人々は、既に以前に該說の鞏固なる辯護者が爲したるが如くに、右に述べたる發展に出來得る限り反抗し又之を妨止する樣試みなければならない。乍併、無產者階級が政治的權力を略取することのみが、政治的大危機によつて生ずる政權の奪取を意味するものであるか。又其は無產者階級が無產者以外の全社會に對して國家權力を獨占し利用することを意味するものであるか。

之を肯定する者は、玆に次の二つの事實を回想せしめらるゝのである。即、『巴里自治團』(Die Pariser Kommune) は、「勞働階級が既存の政治機關を簡單に占有し而して之を彼等自身の目的の爲に運用するは不可能である」と云ふことの證據を與へた、と一八七二年にマルクス及エンゲルスは『共產黨宣言』の新版序文に於て說明を爲したのである。而して一八九五年にはフリードリッヒ・エンゲルスは『階級鬪爭』(“Klassenkämpfen”) の序文に於て詳細に說明して言ふ、政治的恐怖の時代即無自覺なる民衆の眞先に立てる自覺したる少數者によりて實行せられたる革命の時代は、今日は過ぎ去つて了つた。軍隊との大規模の衝突は社會民主々義の不斷の發展を抑制せんとする手段となるであらう、加之姑くの間でも之を退步せしめんとする手段となるであらう。——約言すれば、社會民主々義は、非合法的手段や革命に依つてよりは、寧ろ合法的手段によりて遙かに良く發展するものであると。而して以上の見解に從ひ、彼は、社會民主黨の次の職務として、「其投票の增加を中絕せざる樣に保持すること」或は「議會的活動を徐々に宣傳すること」を指摘してゐるのである。

斯くてエンゲルス其人は、右の意見にも拘らず、彼の數多き例が示すが如くに、進化の速度を常に多少過重視したのである。併し人々は斯う言ひ得るであらうか、彼は、勞働階級が政治的權力を略取するを、斷念した。何となれば彼は、合法的宣傳によりて確保せられたる社會民主々義の不斷の發展が、政治的危機に依つて妨害せらるゝを避けんと欲したからと。

若しさう言ひ得ないならば、換言すれば彼の推究に讚意を表するならば、然る場合には次の事が說明せられても、何人も道理上其れに惡感を抱くことは出來ない——即社會民主々義が遠く將來に亘つて爲すべき仕事は、大破裂を思案する代りに、勞働者階級を政治的に組織して之を民主々義に發達せしむること、及勞働者階級を向上せしめ國家の實質を民主々義的傾向に變移せしむるに適する所の總ての改革の爲に奮鬪すると云ふことであると。

以上は、余が余の駁論に於て述べて置いた所であり、今も尙ほ其總ての意義に從つて主張する所である。又其れは、(既に提出して置いた)當面の問題に關しては、エンゲルスの說と結局同一である。何となれば民主々義が常に意味する所は勞働者階級が其の知識的進步と經濟的發展の程度に從つて一般に實行し得らるゝ程度の、彼等の(勞働者階級の)支配と云ふことであるからである。且又エンゲルスは、其既揭の個所に於て、既に『共產黨宣言』が「民主々義の獲得を戰鬪力ある無產者階級の第一の且最重要の任務の一として宣言した」と云ふ事實に、明白に說き及んでゐるのである。

約言すれば、エンゲルスは危機を目標とせる

戰略の勝利を全く確信せるが故に、彼は亦、其戰略にとつて獨逸に於けるよりも有利なる傳統を持てるラテン諸國に對しては、其戰略の改訂が必要であると考へてゐる。「よし國民間の戰爭の條件が變つたとても、階級間の鬪爭の條件が縮少される譯ではない」と彼は誌してゐる。既に人は之を忘却したのであるか？

三

勞働者階級の爲に民主々義を獲得するの必要なることを、疑問とした者はない。其處で論爭された點は、社會破裂說と、獨逸現在の經濟的發展及都鄙に於ける其勞働階級の進歩の程度を以て、突然に起る危機が社會民主々義に望ましくあり得るか何うかと云ふ疑問とである。余は此疑問を否定して置いたが、今も尙ほ其れを否定する。何となれば、余の觀る所を以てすれば、危機の發生し得る可能性の中よりは、堅實なる前進の中にこそ、永久的成功に對するより大なる保證が存するからである。

而して余は、諸國民の發達上に於ける重要なる時期は跳び越され得ない、と云ふ確信を抱いてゐるからして、其處で社會民主々義の次の任務に最も重大なる價値を置くのである。即勞働者の政治的權利を獲んが爲の奮鬪、都鄙に於ける勞働者の其階級の利益を擁護せんが爲の政治的活動、並に勞働者の經濟的組織の事業に最も重きを置くのである。此意味に於て、當時余は、「運動と云ふことは余にとつて總てゞあるけれども、一般に社會主義の窮極目的と稱せらるゝものは何でもない事である。」と云ふ文を草したのである。而して此意味に於て今日も猶ほ其れを書くのである。其『一般に』と云ふ言葉は、其命題が唯條件附に解釋せらるべきであつたと云ふことを、示さないとしても、次の一事は明白である。即其命題は、社會主義的原理の終極の遂行に關して、無關係であると云ふことを表はすことは出來なかつたが、乍併、事物の最後の形成の狀態に關しては、無關係——或は無頓着と云つた方が宜く言表はさるゝであらう——であると云ふことを、表示することが出來た、と云ふことである。如何なる時に於ても、余は未來に對して、一般原理以上に出づる興味を持たなかつた、尙又如何なる未來記も終り迄讀むことは出來なかつた。現代及最も近き將來の任務にこそ、余の思想と努力とは關係するのであつて、而して其れ以上の遠き將來は、右の關係に最も適したる活動の手本となる場合に於てのみ、余は其研究にも力を盡くさんとするのである。

勞働者階級が政治的權力を略取するとか、資本家を剝奪するとか云ふことは、其れ自身窮極の目的ではなく、寧ろ一定の目的及努力を成就せしめんが爲の手段に過ぎないのである。其れ等の事は、斯る單なる手段として、社會民主々義の綱領に於て要求されてゐるのであつて、何人からも爭はれないのである。從つて其れ等を成就した後の狀態に就いては、何事も豫言することは出來ない。唯彼等を實現せんが爲奮鬪し得るのみである。乍併、政治的權力の略取の爲には、政治上の權利を獲ることが必要である。而して現今獨逸社會民主々義が解決しなければならない所の、方策中の最重要の問題は、余の觀る所を以てすれば、獨逸勞働者の政治上及經濟上の權利擴張の爲の最良の方法如何に關する問題である。此問題に對して一の滿足なる解答が發見されなくては、他のものゝ語勢は結局唯朗讀に過ぎないものとなるであらう。

四

以上を以て信書の拔萃は終つてゐるが、更に

彼は、彼とカアル・カウツキイとの間に於ける論戰は右の說明に關したものであつて、其論戰にはフイクトオル・アドラアが『維納勞働者新聞』に於て關係するに到り、而して彼等の爲に勵みを受けて一八九八年一〇月二三日より"Vorwärts"に於て更に他の說明を爲すに到つた旨を述べて、其一部分を特に拔萃してゐる。是亦彼の階級鬪爭に關する見解の大要を知ることを得るが故に、抄譯して以て茲に附記しやうと思ふのである。

民主々義的制度の發達と共に階級鬪爭の緩和せらるゝことを、余が期待したと云ふことに對して、アドラア及其他の人々も惡感を抱いた。而して其れは、余が專ら英國式の偏見を以て、事情を觀察するからであると主張する。之は全く事實ではない。よしんば一步を讓つて、「一段進步した國は、進步の後れた國に、其れ自身の將來の實例を示してゐる」と云ふ命題が、所詮其價値を失つて、而して大陸の發達と英國の發達との間の總ての差異を——其れを勿論余も亦全く認めてゐないと云ふ譯ではないが——十分顧慮してゐる、と假定してみても、余の見解は大陸に於ける種々の現象に基いてゐるのであつて、其現象たるや、何人も鬪爭熱の中に恐らく一時は看過してゐても、而も何時迄も認めないで居ることは出來ぬものである。先進諸國に於ては何處に於ても、吾人は階級鬪爭がより穩和なる形式を採るを見る、而して若しさうでないならば、將來に於ける見込は甚だ望少きものとなるであらう。勿論發展の一般的步調は、循環し來る退步を除き去つては了はない。乍併獨逸に於てすらも、例へば一般民衆の增大する部分が今日ストライキに對して如何なる態度を採るか、即今日に於ては多くのストライキが、十年二十年前とは全く違つた且一層思慮ある方法で取扱はれてゐると云ふことを、明瞭に描き出してみるならば、其處には記錄すべき一進步のあることを、何人も爭ふことは出來ないのである。

假令——マルクスの口調を借りて——「明朝驚異すべきことが起きるだらう」と敢えて言はなくとも、其れは余の意見に依れば、社會主義的運動に、大危機說よりも、一層希望に滿ちたる道を示してゐる、而して破裂を行はんが爲に、其鬪爭者の熱心も又精力も必要としないのである。アドラアも勿論之を、余に對して爭ふとはしないであらう。

余の發表した解釋が、黨內に於て何等の反對を蒙らなかつた時代があつた。若し今日は其事情が違つてゐるならば、余は其中に、現代の或現象に對する了解することの出來る反動のあることを知る、而して其反動は之等の現代の現象と共に消え去り、舊に復歸して次の一事を認識するに至るであらう——吾人の他の社會的生に於て徐々ではあるが堅實に行はれ始めてゐる所の、一層人間味ある觀察方法が、民主々義的制度の發達に從つて、亦更に重要なる階級鬪爭にも行はれずにゐることは出來ない、却て此階級鬪爭に對しても、同樣により、溫和なる形式を決定するであらうと云ふことを。百年以前には流血の革命を必要としたであらうと思はるゝ改革を、吾人は今日、投票紙、示威運動及之等に類似したる壓迫手段に依つて實現するのである。（一〇、一二、一二）